

スタンダード研究会会報

(1999) No. 9

1999. 05. 30

目 次

○ 研究会発表要旨	・ ・ ・ ・ ・	1 - 10
○ 書評・新刊紹介	・ ・ ・ ・ ・	11 - 17
○ 会員研究活動報告	・ ・ ・ ・ ・	18
○ 会員名簿	・ ・ ・ ・ ・	14
○ 後記	・ ・ ・ ・ ・	19

【研究発表要旨】

第22回 (1998.05.30 於成城大学)

スタンダードのフランス

南 玲子

I : 十九世紀前半に支配的であったフランス国内の対立イメージ

はじめにフランス国内の社会的文化的な対立項をスタンダード研究の背景として概観しておく。古典主義期以来、従来の農村と都市の対立が中央集権化の進行にともなって変容し形成されたパリと地方の対立が支配的になっていくが、殊に十九世紀前半の歴史研究に由来する「中世南フランス」の発見と神話化によって、国内の南北軸という新しい対立構造が現れた。トゥルバドゥールとアルビジョワ十字軍の犠牲者という側面の強調によって聖別化された南部は、帝政末期から王政復古期にかけては地方自治主義者に、七月王政期には反国家的分離主義者に利用され、また浮薄でピトレスクな南フランスとして人気を博した。他方の北フランスについてはフランス国家の直接の先祖の地であるうえ首都を含む地域であるためにことさら北部らしさが語られることはなく、複数の紋切り型と化した南部と対をなす北部、あるいは単なるパリとその周辺地域というイメージの域を出ることはなかった。

II : 領事就任以前のフランス研究の試みとその限界

まず若きベールが習俗や情念に対して好奇心を抱いていたことに注目したい。中央学校時代に賞として得たアベ・デュボスの詩画論で相対主義を学び、習俗の理解には政体と気候の研究が不可欠であるという考えに既に感銘を受けていた彼は、パリでの多くの読書を通してその正しさを確信していく。ところで彼の最初の大規模な旅行は一七九九年のパリ上京であるが、この旅についてもイタリア遠征軍参加についても『アンリ・ブリュラールの生涯』では感情の高揚が旅の行程の記憶を払拭してしまったとあり、読書の進展していなかったこの時点において、しかも感動のさなかにあつた彼には、旅を通しての観察に勤しむ意欲も余裕もなかったことが分かる。だが先述の読書三昧の時期から数年間は必ずしも母国に無関心ではなく、一八〇五年マルセイユに向かうにあたって社会と人間の観察を自分の課題とする旨が日記に記されるし、到着後もさらなる読書によって研究への意欲が高まる。但し研究計画が完遂されることは稀で、例えば一八〇六年のマルセイユの習俗の描写の試みも頓挫した。それでも同年五月二〇日からの国内旅行は丁寧に記録され、一八一〇年四月には日記にヤングの旅行記を手にしてフランスを旅したいとの記し、翌年四月末から五日間のル・アーヴル旅行では同行の友人とともに土地研究の意欲をもって旅の記録を残している。冒頭部分でフランスに言及する『一八一一年 イタリア・ツアー』に見られる、習俗を描くもの以外自分の興味の対象とならぬ、という一文は彼が旅に課そうとした研究的な性格を示すものである。

ところが帝政期のうちに彼のフランス研究意欲は減退する。のちに様々な感動の余韻と

ともに描かれるイタリアは、南北対立の図式を実感したブラウンシュヴァイクでの倦怠の時期に南方の象徴として顕在化したと考えられる。一八一二年の書簡を参照すると、八月にはミラノとイタリアを見て以来見ることへの渴望を失いすべてが粗野に感じられるとあり、また十一月にはパリ―ストラスブール間で道中起こる事柄はすべて知り尽くしているので退屈であると書かれていて、数度往復するものの興味をもった形跡の少ないらしい故郷―パリ間の諸地方同様、おそらく馴れによる無関心も加わって、北の地で南方を夢想するスタンダールにはフランスの諸地方の旅がもはや精彩を放たなくなってしまうことが読みとれる。

『恋愛論』からは前半生におけるスタンダールのフランス観を推測することができる。スタンダールは彼好みの「些細な事実」を何らかの論理に従うよう気候、政体、気質といった指標に照らして分類し、次いで恋愛、女性、幸福に関して敷衍していくという仕方自分なりの人間研究を志していたが、そうした彼らしい方針に従って執筆された『恋愛論』のなかのフランスは、ヨーロッパの南北軸を意識すると、寒く陰鬱で瞑想に沈む北と暑く明るく情熱的な南のどちらにも分類しがたい、あるいは北と南によって表される座標上のいわば原点の位置を占めているといえよう。一八二二年の時点ではフランス諸地域間の差異への言及は見られず、フランスらしさとして論じられる特質は、よくも悪くもサロン文明の中心たる首都パリの規範に基づいた価値体系の諸要素とほぼ同値であるといえる。

Ⅲ：『フランス旅行記』のなかのフランス

フランスとりわけ地方に長いこと無関心であったスタンダールが、長期にわたる旅行と多少意欲的なフランス関係の読書によってフランスの諸地方を知るようになったのは、一八三七―三八年の国内周遊の紀行文的作品である一連の『フランス旅行記』執筆の時期と考えてよいであろう。同書には膠着状態にあるパリのサロン文明への批判、パリとの対比で浮上する地方的なるものに対する嫌悪、内陸部の卑小さへの軽蔑が随所に見られる。通常フランスの南北区分線はロワール川と重ねられるが、往々にして区分線の南側は、繁栄する北側に対して野蛮な後進地域とされる。スタンダールにもグルノーブルとボルドーを例外としつつ、ナント・ディジョン線の南側が偏見の土地で文明化しそこなっていると指摘する箇所がある。

それでもギリシア植民市マルセイユ、教皇庁のあったアヴィニオン、トゥルバドゥール文化のプロヴァンスといった過去の南フランスを幾度も称揚し、また執筆当時における南フランスと南ヨーロッパとの類似点としてイタリアやスペインで享受される澁刺とした活気「ブリオ」を強調することにより、南フランスは、歴史的観点のみならず同時代的な視点からも、スタンダールが地方一般に対して抱く嫌悪感を免れることになる。イギリスで重宝される「スナッグ」と相容れず、「フランス」では虚栄心が妨げ、パリではひどく滑稽とされるはずのブリオは、南方の人々にとって幸福のイメージそのものなのである。

一地方として政治経済、理性、文明の浸透の度合いという近現代の発展を重視する判断基準をもってすれば南フランスはパリに後れをとっている地方群にすぎない。しかしギリシア、イタリア、スペインとの歴史的な絆、南ヨーロッパと共有されるブリオや南方的享

楽、芸術、心地よい気候を思うとき、スタンダールにとって、フランス南部はフランスの内部でありながら、味気ない近代化の具現たるイギリスおよび「イギリス化」しつつある北フランス諸地方、および見事ではあれ過度な文明を特徴とするパリに対しての優位を確立することになる。

エピローグ：『フランス旅行記』取材旅行をめぐって- スタンダールとフランス諸地方

最後に、パリに思いを馳せていた彼が何故領事休暇中にフランス地方周遊を実行したのか、もしその動機が金策に尽きているとするなら出版が拒否された後の旅日記執筆続行をどう説明するか、という問いに対する回答を彼の「地方観」とともに考えておきたい。スタンダールは嫉妬に苛まれながらもパリを卑屈かつ不器用に模倣する地方人に苛立ちを覚える。だが『フランス旅行記』中の《地方人が敢えて自分自身たらんとする日が来れば、地方人はもはやいなくなるだろう》という文章は、確固たる自己を持つ人間は、たとえ首都から遠く離れた「地方」と呼ばれるべき地域の住民であっても忌まわしき「地方性」を免れると読めるのではないか。その場合、奥地で純粋種を見つけることへの期待やフランスの様々な民族集団の研究が楽しみだという記述が真実味を帯びてくる。彼は均質化を強いるイギリス風の近代化に脅かされつつあった、一地域の独自性および一国内の多様性に好奇心ないし愛着を覚えていたのではないか。従って前掲の問いに対しては、フランスの多様性を消滅前に記録すること、ブリオという南方の住民と彼の共有する幸福のイメージをフランス国内にあってなお追求することへの意欲が、旅の動機として介在していたと回答できるのではないだろうか。

第22回 (1998.05.30 於成城大学)

文明論のなかのスタンダール

後平 隆

19世紀に書かれた文明論といえば、ギゾーのそれである。ヨーロッパ文明なるものが存在し、その中心にフランスがいることを宣揚することからはじまるギゾーの文明論の偉容に較べれば、スタンダールの文明史的考察は断片的である。彼は文明史家ではない。が、だからといって、彼がヨーロッパ文明の帰趨に無関心であったということとはありえない。見やすいところでいっても、彼の紀行文には文明論的断章が溢れている。本論の目的はスタンダールのイタリア紀行の随所に窺える考察を、同時代の思想家の同種のそれと突き合わせることによって、彼の考え方の特徴に一瞥を与えることにある。

スタンダールはフランスを嫌い、イタリアを礼賛した。しかし単なる二項対立ではない。

また空間的座標だけが問題になってもいけない。イタリア、とひとまとめにできない特徴を各都市はもっていて、その特徴を言い表そうとすると、時間的座標が、つまり歴史の変遷が問われる。ことに長期にわたる統治形態が、各都市の風俗を決定した。たとえば文明はローマとナポリまで及ばず、ボローニャにもどってくると、まるでフランスの地方からパリに戻ったときのように、文明の喜びを感じる。ヴェネチア社交界の「音楽と優美」は、愛想の良いフランス人にはわかる由もない、というような考察が続く。ところでギゾーはフランス文明の卓越を言うのに、「明快、社交性、共感」というフランス人の国民性に言及している。国民性とはなにか。エリアス流に言えば、フランスの国民性は中央集権国家としてのフランスにおける”宮廷社会”での権力構造に基づく交際のありようが、宮廷を出て順次国民の下層へと広がった結果成立したものである、となる。スタンダールがイタリアの都市の文明度を測るときに、パリの文明が透かし模様のように背景に控えているのは、ギゾーの論に似ている。ところがパリの文明、フランスの文明の圏外にあるものにこそスタンダールは最大の賛辞を呈する。

ナポレオンがコンスタンやシャトーブリアンに痛烈な弾劾の対象になっているとき、スタンダールが積極的にナポレオンを擁護する筆致にも、おなじ批判精神をみてとることができる。ことにコンスタンが、古代人の自由は現代人の求める私的な自由とはまったく異質であるにもかかわらず、ルッソーの思想的影響下に両者を混同した結果が革命の流血であり、ナポレオンの専制政治であると断定し、文明がここまで進歩した段階において、専制政治は不可能であることを証明しようとしているときにも、スタンダールはナポレオンを古代ローマ人とおなじ位相において擁護、評価するいっぽうで、ナポレオンを立憲君主制には相応しくない政治家として、その文明史的限界を指摘している。

しかし代議制度にたいしては、コンスタンがかなり楽観的見通しで一貫しているように見えるのにたいし、スタンダールの韜晦は、あきらかである。韜晦、あるいは一見しての矛盾した態度。ナポレオンを古代ローマ人とおなじレベルで評価すべき偉人であるとしながらも、いっぽうでその政治家としての文明史的限界を指摘し、さらにはイタリア人が自分自身に再び戻るためには、両院制度が定着するのを待たなければならないだろうと指摘する。ナポレオンはスタンダールの言う文明の第三段階を理解しなかったからこそ、エネルギーのひとでありえたのではないか。とすれば、ナポレオンが若年期にもっと開明的な教育を受けていたならば、と彼のために惜しむのは、やはり韜晦でなければ矛盾ではないのだろうか。

スタンダードと舞踊

Stendhal et la danse

井出 勉

スタンダードと舞踊と言えば、サルヴァトーレ・ヴィガノのバレエとの関わりを中心に論じられているものがほとんどである。しかしながら、ヴィガノとは逆に、等閑視されてきた嫌いのあるのが、スタンダードの踊り子たちへのまなざしである。とりわけスタンダードもしばしば言及した、当時有名で相反する個性を持ったマリー・タリオーニとファニー・エルスレールの二人の踊り子の存在は、スタンダードの舞踊論を理解する上でヴィガノと同等に論じられるべきではないだろうか。この二人以外の踊り子たちにもスタンダードのまなざしは注がれる。それも、スカラ座ではなくむしろオペラ座の踊り子たちである。というのも1834年から35年にかけて書かれた未完の小説『リュシアン・ルーヴェン』(以下、『ルーヴェン』)では、パリのオペラ座の栈敷や楽屋が重要な舞台となっているからである。

従って、バレエやヴィガノについてのスタンダードの舞踊論を明らかにするとともに、これまで正面から論じられていないタリオーニやエルスレール、さらにはオペラ座の踊り子たちへのスタンダードのまなざしを読み解いてみたい。このまなざしを読み解くことが、『ルーヴェン』の同時代的読書に新しい光を当てることになるのではないだろうか。

イタリアのバレエ振り付け師・作曲家であり、自身舞踊家でもあったサルヴァトーレ・ヴィガノ(1769-1821)の「シェイクスピア風の想像力」を、スタンダードはカノーヴァやロッシーニと同列において評価している。『パルムの僧院』でもピエトラネーラ伯爵夫人にスカラ座でのヴィガノのバレエを観に行かせている。このスタンダードのヴィガノ観を知ることは、同時にスタンダードが当時のイタリア・バレエとフランス・バレエに対して抱いていた見解を理解することでもある。スタンダードは、技術的な完璧さを求めるフランス・バレエの冷たさを嫌い、オペラ座の踊り子の瘦身傾向に異を唱える。ヴィガノに代表されるイタリア・バレエには、成熟した美と官能性を満足させる健康的な踊り子の美しさがあるからである。それゆえ『ルーヴェン』執筆時のオペラ座の花形タリオーニとエルスレールのどちらにスタンダードが与したかは明らかである。同時代の他の作家ならむしろ好んだであろう小柄で繊細なタリオーニに対し、大柄で派手なエルスレールには力強さや官能性があった。エルスレールは、フランス・バレエとは異質の活気をもったスペイン舞踊《カチューチャ》で人気を博すが、スタンダードも『南仏旅日記』の1838年5月24日付マルセイユの記述にその名を挙げて讚美している。さらに『ラ・シルフィード(空気の精)』と言えばタリオーニという神話にもかかわらずスタンダードは、『ルーヴェン』では踊り子の《空気の精》の衣装には言及してもタリオーニについては一言も触れていない。他方エルスレールの踊りについては作品中二度言及し、リュシアンはその力強いステ

ップに魅了されるのである。

『ルーヴェン』の重要なトポスの一つであるオペラ座は、現在のシャルル・ガルニエの設計による絢爛たるオペラ座とは程遠いものであったことを認識しておく必要がある。それは一年という短い期間で 1821 年に建てられた、急ごしらえのものであった。確かに、完成時には、これまでの劇場に比べて座席にゆとりがあり、最新のガス灯が円天井を照らすといった設備を誇っていたが、いかんせんもともと 10 年ほどの使用しか考慮していなかった。それゆえ 1831 年にヴェロン博士が新支配人に就任した頃のオペラ座は、設備も老朽化し経営も赤字状態の有様であった。ヴェロン博士は、『悪魔のロベール』や『ラ・シルフィード』の一連の成功で建て直しに成功する。しかしこの成功の陰には、オペラ座の楽屋を高級娼婦の館に変貌させた博士の計算が働いていたのである。ヴェロン博士は、楽屋裏の練習場を豪華なサロンに改造し、出資者である銀行家や有力なジャーナリストなどを自由に出入りさせ好みの少女たちを物色させていたのである。従って銀行家である父ルーヴェン氏の存在はこの文脈でも読み解く必要がある。だが、サロンでの交際よりも踊り子たちの娼婦性に隠れた《自然らしさ》や《才気》を愛するルーヴェン氏や、「自然らしさは踊り子たちのなかに逃げ込んでしまっている」と考えるリュシアンはまなざしは温かい。それはスタンダードが、バレエの観客として踊り子たちの美と官能性を求めたとしても、外見の娼婦性とは違う内面の《自然らしさ》を踊り子たちに認めていたからであろう。成熟したスタンダードの分身とも言えるルーヴェン氏は、社交界の偽善のないその《自然らしさ》ゆえ踊り子たちを愛する。一方、リュシアンは、社交界の花形グランデ夫人の内面の《娼婦性》を、父ルーヴェン氏に強制された《自然らしさ》を持つオペラ座の踊り子たちとの交際から、徐々にではあるが見抜けるようになっていく。しかしそれでもやはり、シャストレール夫人を愛しているがゆえに、踊り子たちに対して時として残酷な比較をするのを避けられない。その意味でも、ルーヴェン氏は成熟したスタンダードの、リュシアンは若き日のスタンダードの分身とでもいえるのだろうか。『ルーヴェン』の中のオペラ座というトポスは、スタンダードのフランス・バレエや踊り子に対するまなざし、さらにはエルスレールという名のアウラのもとにも読み解くべきではないだろうか。また『ルーヴェン』の舞踊に注目すると、舞踏会におけるシャストレール夫人の姿を、その簡素なモスリンの衣装ともども《空気の精》というひとりの踊り子に重ね合わせることも可能となるのではないだろうか。

結局、『ルーヴェン』執筆以前に旅行記や評伝で述べてきた舞踊や踊り子たちに関する記述は、スタンダードのイマジネールの産物である『ルーヴェン』の舞踊の世界に結実していると言することができる。この舞踊の世界はまた、スタンダードの《イタリアニテ》の神話の重要な核を成すものの一つなのである。

『パルムの僧院』を読む／その一 ― Fausta の挿話

粕谷祐己

『パルムの僧院』第13章の大部分を占める「ファウスタの挿話」はかねてより全体の構成からはみ出るもの、「取り外し可能」なものという見方をされることが多い。スタンダール自身が明らかにこの挿話の長さを気にしているのだから無理もないのだが、しかしそれでも作者が第一部締めくくりに位置に置いたということはこの挿話が単なる脱線とは言えないことを示しているのではないだろうか。筆者はむしろ、「この小説は、こういうことですよ」と読者に誤解のないよう作者が念を押している個所であるような印象を受ける。つまり筆者はあえてこの個所は『パルム』着想の根幹、イデーの核心を提示する重要な挿話であると主張したく思う。

そもそもこのエピソードが小説内で果たすべき役割は何だったか。スタンダールがバルザックに弁解している言葉を素直にとるなら、それは「ファブリスに恋ができないことを示す」ことである。第二部に入ればすぐクレリアとの恋が始まってしまうのでこの言葉はあまり真剣には受け取られないのだが、われわれは少なくともスタンダールの真意を理解しておかなくてはならないはずである。スタンダールがこの個所でしていることは、「恋のできない」ファブリスが恋する者の行動をシミュレートすることによって「見た目は熱烈に恋している若者に見える」のを示し、内と外の対照を際立たせることに他ならない。恋という感情の「欠如」ということは視覚的には描写し得ず客「観」描写ができないがゆえにこのような方策がとられていると考えるべきである。外見上ファブリスが紛れもなくファウスタに言い寄る男でありながら、彼の興味が実はファウスタのすぐ側にいるベッチーナを志向対象としているという状況の提示も、「愛する」ことをめぐる諸事象が視覚による認識と基本的に相容れないという主張と解すべきであろう（ファブリスにとってとにかく「恋すること」が目的なのだというなら、本当はここでベッチーナを追い始めてもよさそうなものなのであるが、そういうそぶりは全くない。ベッチーナに対して抱いたのはむしろ愛玩動物に対するような感情であり、それが自分の求めている人間の愛、しかも優れた魂同士の愛ではないことをファブリスはよく分かっているのだ）。

第一部で既にファブリスはクレリアに「会っている」。つまり「見ている」。しかし両者の恋が始まるのはこの時ではない。第一部の残りを通じてファブリスはクレリアのことを思い出さえない。恋愛小説として全く奇妙なこの構成は、まさしく『パルム』の本質の現われに他ならない。文学的描写のレベルだけでなく、恋愛感情の成立においても視覚はその日常的な重要性を奪われている。ファブリスがファウスタにひかれた原因が彼女の「声」であったというのも意味が深い。

しかし第二部に至ってファブリスとクレリアに恋愛感情が成立してしまうと今度は一転して「相手の顔、目を見る」ことへの執着が問題化して視覚の重要性がクローズアップさ

れることを付け加えておきたい。恋愛において視覚が果たすべき機能についてスタンダールが抱いた哲学的イデーこそ、『パルム』全体を成立させた着想の核心に位置するものである。

第24回 (1999.3.28 於京大会館)

マリー=アントワネットの影

下川 茂

マリー=アントワネットとバルナーヴが、『赤と黒』のマチルドとジュリアンに反映していることは、すでに F. Vermale が «Stendhal et la Révolution» (*Ann. hist. de la Révol. française*, mars-avril 1934, p. 146-151) で指摘している。確かに、二つのカップルに共通点は多く、『赤と黒』のエピグラフにもバルナーヴの名は登場するから、関連は明らかである。しかし、アントワネットは『赤と黒』のマチルドにだけその影を落としているのだろうか。Vermale の論文は短く、マチルドとジュリアンについて簡単に触れているだけであり、他に、マリー=アントワネットとスタンダールの関連について詳しく研究した論文も存在しないようである。

ルイ十六世の処刑を知った若いスタンダールが大きな歓喜を感じたことは、『アンリ・ブリュラーの生涯』に記され、多くの研究者が取り上げている。スタンダールにルイ十六世の処刑が強い印象を与えたことは間違いないのだが、不思議なことに、その後起こった、王妃、王妹の処刑、タンプル塔での王子ルイ（ルイ十七世）の死については、王党派であったベール家で話題にならなかった筈がないと思えるのだが、スタンダールは一切言及していない。この沈黙は無関心ではなく、逆に、表に出すには強すぎる影響を受けたことを示しているのではないだろうか。ここでは、『赤と黒』と『パルムの僧院』の二つの作品について、その影響を探ってみたい。

『赤と黒』でマリー=アントワネットの姿が投影されているのはマチルドだけではない。ヴェルジーのレナール夫人が『フィガロの結婚』の伯爵夫人ロジーヌを下敷きにしていることは、すでに知られているが、マリー=アントワネットがトリアノン宮殿で『セヴィリアの理髪師』のロジーヌ役を演じたことが、カンパン夫人の回想録に記されている。1823年に出版された、この «Mémoires sur la vie privée de Marie-Antoinette, suivis de souvenirs et anecdotes historiques de Mme de Campan» について、スタンダールは、『アンリ・ブリュラーの生涯』等で、その信憑性を疑っているが、読んだことは確かであろう（筆者は 1879 年 Firmin-Didot 版使用）。ところが、夫人の回想録で描かれるマ

リー=アントワネットの性格にはレナール夫人と共通する点が多い。カンパン夫人は、アントワネットのドイツ的な素朴さ、単純さ、自然さを、ヴェルサイユの宮廷の堅苦しい礼儀作法と対比して強調しており、子供ができて人妻らしい落ち着きができたアントワネット、ヴェルサイユ宮殿よりトリアノン宮殿を好んだアントワネットは、マチルドよりもレナール夫人を思わせる。そして、革命が起こったら、一切を捨てて守ろうとジュリアン=バルナーヴが考えるのも、マチルドではなく、レナール夫人と子供たちである。なおざりにされた教育の結果、無知だが、イタリア語をよくし、音楽好きという特徴も両者に共通する。レナール夫人を飾る装飾品として印象的な登場の仕方をする真珠の首飾りや、万一の場合の財産としてのダイヤを、アントワネットも持っている。

さらに、ジュリアンは、バルナーヴによってアントワネットと関連するだけではない。いくつかの点で、かれはアントワネットの夫、国王ルイ十六世にも似ている。王が驚異的な記憶力の持ち主であったことはカンパン夫人の回想録に出ているが、タンプル塔における国王一家の生活については夫人は触れていないため、別の資料による必要がある。王の召使クレリの回想録 (Jean-Baptiste Hanet-Cléry: «Journal de ce qui s'est passé à la Tour du Temple pendant la captivité de Louis XVI, roi de France», Londres, 1798) がそれだが、これについてスタンダールの残したものには言及した箇所がなく、残念ながら、読んだという確証はない (筆者は1987年 *Mercure de France* 版使用)。しかし、当時有名な回想録であり、獄中のルイ十六世に関する最有力文献だから、回想録マニアのスタンダールが読んだことは十分考えられる。レナール夫人狙撃後、投獄され、裁判、処刑へと至るジュリアンと、タンプル塔に幽閉され、裁かれ、処刑されるルイ十六世の間には、いくつも共通点がある。王は、幽閉中、大量の読書をし、裁判に当たっては、同情を買うことを嫌い、死刑判決後は、自殺を拒否し、食欲も衰えず、眠りも深い。ジュリアンとの大きな違いは、キリスト教の信仰によって、死の恐怖を免れている点であるが、ジュリアンも最後には死の恐怖を克服する。王は、処刑当日、辛い目にあわせるのを避けるために、家族との面会を避けるが、これも、ジュリアンが、処刑の日、マチルドとレナール夫人を遠ざけるといふ細部と一致する。

『バルムの僧院』のジーナ・デル・ドンゴにもマリー=アントワネットの特徴が移し入れられている。モスカの髪粉をからかい、「鳥のように軽快な」ジーナは、軽快な身のこなしでヴェルサイユの宮廷の堅苦しい作法を馬鹿にする若き日のアントワネットであり、逆境に耐える強さとエネルギーも両者に共通する。(カンパン夫人は、たびたび夫ルイ十六世のエネルギーの不足を嘆くアントワネットを描いている)。

獄中のジュリアンにタンプル塔のルイ十六世の姿が反映しているように、ファルネーゼ塔のファブリスの生活にも、タンプル塔の王と共通する要素がある。王たちが閉じ込められた部屋の窓には、日除けがあり、王は、階上の王妃と、窓から窓へ、紐を使って、物を運んだり、通信したりする(クレリ)。建物の外観、構造にも共通する細部がある。また、チュイルリー宮殿に幽閉されていた時期には、王と王妃の毒殺未遂事件があり、ファルネーゼ塔で毒殺されかけるファブリスを思わせる(カンパン夫人)。

『バルムの僧院』へのアントワネットの影響を考える上で、もう一つ欠かせない資料が

ある。それは、アントワネット裁判の記録である。これも、スタンダールには言及がなく、読んだという確証はないが、様々な革命史で資料として使われており、スタンダールの目に触れた可能性は高い（筆者は Gérard Walter: *Actes du Tribunal révolutionnaire, Mercure de France, 1986* を使用）。また、裁判の様子は新聞等で報道され、噂にもなった筈だから、少年スタンダールが内容を知った可能性も考えられる。裁判の争点の中心は、もちろんアントワネットの反革命行動だが、もう一つ、ある意味でそれよりも衝撃的な事実の暴露がなされた。その事実とは、王子ルイが看守兼家庭教師役のシモンに告白した、母と叔母を対象とする近親相姦である。アントワネットは、「法廷にいるすべての母親」に訴えて否定する。しかし、彼女は処刑され、続いて叔母が断頭台上り、タンプル塔で一人独房に入れられた王子ルイは、衰弱し、病死する。

この王子ルイとアントワネットを主人公とする悲劇の反映を、『バルムの僧院』に見ることができる。叔母ジーナを愛しながら、その近親相姦的愛情の危険を察知し、叔母から遠ざかったファブリスは、それが遠因となって、逮捕・投獄され、牢獄でクレリア（若い母親的）と再会し、窓越しに彼女と通信し、食料を貰い、さらに叔母とも窓越しに通信し、両者の協力で脱獄に成功する。その後、人妻となったクレリアと姦通し、息子サンドリーノが生まれる。病死したことにして息子を誘拐しようとするが、実際に息子は病気になり死んでしまい、クレリア、ファブリス、ジーナの死が相次いで続く。叔母の愛を遠ざけるファブリスに、母と叔母を告発する王子ルイが対応し、王子ルイの死に方は、強制的に床につかされ、病死するサンドリーノのそれを思わせる。また、獄中で毒殺の危険に曝され、王妃、王妹と窓越しに通信する父王ルイともファブリスは似ている。ファブリスが父王ルイと関係するのは、一見不思議だが、カンパン夫人の回想録にルイ十六世の叔母アデライードがアントワネットとの結婚に反対したことが記されており、叔母に結婚を反対される甥という点で共通点がある。また、ルイ十六世とアントワネットが、ファブリスとクレリアに対応すると考えると、王子ルイの死がサンドリーノの死を思わせるのは自然である。王子ルイは、父王を裏切って、母と母子相姦を結び、その母をも裏切って母を告発し、母の死を招き、最後に自分も死ぬ。サンドリーノが自分を裏切って母クレリアと母子相姦を結ぶことへの恐れが、ファブリスによるサンドリーノ誘拐の奥底に秘められている感情ではないだろうか。サンドリーノは王子ルイと違って未遂だが、しかし、未遂故に、王子ルイのように母を裏切り、母に先立たれることもなく、母に看取られて死ぬことができる。

スタンダールは、アントワネットと父王ルイと王子ルイの物語に、自らの体験を重ねたのではないか。未遂に終わったが、彼もまた、王子ルイ同様、父を裏切り、母を愛した。母死亡時の二人の年齢もほぼ同じである。母子相姦を実行し、母を死に導き、自らも破滅した王子ルイの物語が少年スタンダールに与えた衝撃は、ルイ十六世の死以上に大きなものだったのではないだろうか。アントワネットと王子ルイの記憶は、母アンリエットの死の記憶と絡み合い、スタンダールの心の奥底深く沈められた。我々は、わずかに小説作品の中で、その影を探ることができるだけである。

【書評・新刊紹介】

書評

L'Avant-Scène Opéra no.175. "Domenico Cimarosa : *le Mariage Secret*", janvier-février 1997, 126p.

粕谷 祐己

L'Avant-Scène Opéra は古今のオペラを一作品づつとりあげて詳説するシリーズ刊行物であるが、先年チマローザ『秘密の結婚』を扱った号が175番目によく現われている。

あらすじと全曲のイタリア語歌詞およびその仏訳、主要部分の楽曲分析をはじめ、初演当時の音楽状況の解説、さらには今日までいつどこでどんな配役で演奏されたか等の上演記録に、ディスコグラフィ、ビブリオグラフィも完備して、スタンダード最愛のこの歌劇に関するもっとも詳細な資料となっている。スタンダード研究者にも必携の一冊であることに間違いない。

書評

Stendhal, l'oeuvre romanesque : texte intégral. Le Catalogue des Lettres, 1997. ISBN 2843570026.

粕谷 祐己

昨今ではインターネットでかなりスタンダード作品のデジタル・テキストが手に入るようになり CD-ROM も数種類出回っているとのことだが、筆者が手にすることができたのは彼の五大小説に *Le Rose et le Vert*, *Féder ou le Mari d'argent* の二編を加えて収録したこの製品である。定価は349F、WINDOWS版のみ。日本語版 WINDOWS 95 でも検索ウィンドウにアクセント入力でき、問題なく走る。テキストを見るのにブラウザを使うので Internet Explorer 3.02 が付属しているが、もちろん Netscape Navigator (3.0 以上) を使うこともできる。

この種のもの常だが底本は "les éditions de poche courantes et les copies de la Bibliothèque Nationale de France" と曖昧な記述しかされていない。Pagination は便宜上のものとみえ、おそらく既存のどの版とも一致していないだろう。

なんの加工もないテキストだけであるが、単語の検索ではどの作品のどこに該当語が出てくるか簡単に分かる。ともかくこれだけのテキストが一度に手軽に扱えるだけでも便利である。

書評

Histoire d'Eleonore de Parme, Texte établi et présenté par Richard Bolster, University of Exeter Press, UK, 1997

岩本和子

スタンダール小説の源泉探しは興味の尽きない楽しいものである。そしてたいてい期待を裏切られることなく「何か」が見つかる。実証的研究、生成過程研究、精神分析的研究などの領域で、あるいはテキストとの自由な戯れの中から、この「探究」は無数の証言や推論を世に出してきた。ボルスターの新刊書はまた一つ屋上屋を架すものにすぎないのだろうか。『パルムの僧院』の最終わずか4、5ページ（プレイヤード版）を占めるだけのサンドリーノの死の逸話を、ボルスターは、イギリスの小説『*The English Brothers*（あるいはハワード家にまつわる逸話）』の中に挿入された、パルムの修道女エレオノールの短い物語と結びつけたのである。導きの糸は1810年3月に記された若きアンリ・ベールの日記の一節であった。作品を読んで「感動のあまり涙にかきくれた」というのである。匿名作家によるこの4巻本長編小説は1809年にロンドンで出版された。当時流行のイギリス小説を次々と紹介していたジュネーヴの雑誌 *Bibliothèque britannique* が小説中最もドラマチックとも言われるエレオノールの挿話の部分を中心に仏訳、発表し、それをベールは手にしたのであった。

ボルスターは当時の雑誌掲載のままに（綴字表記の現代化は施されているが）、エレオノールの物語即ち彼女自身による回想部分とそこに至るまでの小説のあらすじを我々に提供してくれる。小説全体のヒロインであるキャロライン・ハワードは両親とパルムに滞在中に世話になった修道院の院長エレオノールから、死後に一通の手紙を受け取る。それが一人称による回想部分となる。愛の苦悩による罪と懺悔の生涯が綴られ、若いキャロラインへの教訓が与えられるのである。しかし、むしろこのテキストの「序文」においてボルスターが解説する、エレオノール／フェルナンド／ジュリオと、クレリア／ファブリス／サンドリーノの対応図式が、著書の要であると言ってよいだろう。

ボルスターのみならず、サンドリーノの奇妙な逸話に注目した研究者たちは、その真意を測り切れない謎として次の2つの言説を引き合いに出してきた。1つは1840年5月25日付の『ラミエル』草稿への書き込み、「自身の書いたページが次のページのアイデアをくれたものだ。『僧院』はそのように書かれた。私はサンドリーノの死のことを考えていた。それのみがこの小説に取りかからせたのだ。克服すべき困難の要所はあとでわかった。」もう1つは同年10月16日付バルザック宛の手紙である。「私は『僧院』をサンドリーノの死を目指して書いた。本能に激しく訴えていた出来事である。デュポン氏はそれを描写するスペースを取り上げてしまった。」つまり、サンドリーノの死は一エピソードにとどまらない、可能ならばスタンダールが詳細に展開したかった物語の重要な要素と言えよう。それどころか、物語を急転直下悲劇と成し、クレリアとファブリスの愛を神話へと昇華しもする、罪と罰と死の収斂点でもあるのだ。『僧院』テキストの存在そのものにさえ関わる重要な意味を担っているのである。おそらくそれは、『赤と黒』の「牢獄」場

面にも対応するものかもしれない。社会的頂点に昇りつめた主人公は、一転「殺人」を犯して懺悔の生活に入り、自らの死によって真の愛を浄化させるのである。

これまでの研究では例えば伝記的観点からクレマンチヌ・キュリアルスの娘バチルドの死(1827)に源泉を見るもの (Cf. Berthier; *La Chartreuse de Parme*, 1995)、ナポレオンの息子「ローマ王」の死という歴史的事件に見るもの(Guinard-Corredor; «Sandrino et le "roman de l'avenir"» *Stendhal Club*, No 120, 1988)、そしてボルスターのように文学作品に見るものがある(初出は«Sandrino retrouvé: la fin d'un mystère stendhalien» *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 1994)。ちなみにこの論文に加筆訂正を施したのが本書の「序文」で、元の方が簡潔・明解である。そのせいもあるのか、ベルチエ氏は元の論文のボルスター説を「楽観的」と片付けていたのだが (Berthier; *op.cit.*)、「序文」読後の我々にはきわめて説得力があるように思われる。記憶や体験が錯綜的にテキストに織り込まれるスタンダール小説にあっては、他の源泉説も否定すべきでないことはもちろんであるが。

さてそのボルスター説をごくかいつまんで見ておこう。影響関係の証明はまず、イタリア古文書「ファルネーゼ家興亡の起源」以外の源泉を求めることから始まる。古文書の舞台はパルムにはなく、ファルネーゼの愛人は2人の子供をもうけて幸福に暮らすという点で、『僧院』の決定的な結末とは相容れない。つまり古文書にはないサンドリーノの死なくしてはタイトルの『パルムの僧院』が全く無意味となるのである。クレリアとエレオノールとの直接の類似点は、ヒロインのテキスト内への初登場＝恋人との伏線的な出会いが12才で、数年後の再会時に愛が芽生えること、父親に強要された社会的上層者と、真の恋人の同意の上で結婚すること、子供の死と結びつく悲劇的かつ運命的な愛の存続、後悔と懺悔による晩年と死、などである。夫は善良無害でいわゆる俗物である。恋人は名家の「弟」ゆえに初めは社会的地位が低いが、すでに時宜を逸したころに思いがけず莫大な財産を相続する。その他パルム公の脅迫、毒殺のテーマなど、確かに無数の共通要素が散見できる。相違点も当然ながら指摘されている。『エレオノール』には時代背景や政治的分析がない。エレオノールは自らの手で夫を毒殺し、絶えず夫の亡霊に脅かされ、ある日驚愕の余り子供を取り落として死に至らしめるのである。しかし『パルム』にもブラネス氏の予言や予兆といった超自然的要素はある。またクレリアもクレセンチ公を毒殺する可能性は十分あったとボルスターは考える。クレリアの運命をエレオノールのそれより和らげることでスタンダールは自己の作品の「罪」を減らし「幸福」を増やしたのだ、と。

エレオノールの物語、もしくは *The English Brothers* は、いわゆる当時はやりの通俗英国小説で、感傷小説、暗黒小説にも通ずるものであった。ステレオタイプのモチーフにも事欠かない。イタリア、秘密、薄幸のヒロイン、繊細な恋人、愛と罪、あずまや、月、ダイヤ、亡霊、陰気な修道院などである。さらに妨害される愛、個人の自由、世代間の対立、女性の権利の主張といったのちのフランス小説の典型ともなっていく諸テーマもある。これらが1810年つまりナポレオンの大陸封鎖と一連の戦争の時代に、イタリアやドイツなどへの異国趣味も携えてイギリスからフランスへ流入し、盛んな文化交流が行われた点を、ボルスターは重視している。ただ、スタンダールはなぜ『エレオノール』の名を(推

論が正しいとすれば、敢えて) 口にしなかったのだろうか。見栄もあったのだろうか、と言う。アリオストやコレッジオらを創造の源泉とするならともかく、通俗小説、いわば「婦女子」の小説に涙し、あまつさえ晩年の壮大な政治的ドラマ執筆の原動力としたとは、特にバルザックのような巨匠に対しては隠したかったのであろう、と。

『エレオノール』は確かに女性文学である。イギリス女性の社会的地位の特殊性に支えられて、作者も、そして主な読者層も女性であっただろうと言われる。テキスト内の語り手も女性、つまりエレオノールの告白である。そのために女性の心理は微細に描かれる反面、男性たちは表面的描写にとどまり、ヒロインにとっては常に都合よくすべてを許し、理解し、愛を注いでくれる存在なのである。それは『バルム』との決定的な違いだと思うのだが、ボルスターはこの点を指摘していない。『バルム』の語りに奇妙な捻れがあるとすれば、ここに一つの原因が見い出せるのではないか。女性によってイギリス女性に語られたイタリアの情熱の物語が、男性によるフランス人読者への物語へと変装したのである。エレオノールの影が付きまとう限り、スタンダールは「女性的」な語り手となって、時にはジーナへあるいはクレリアへと一体化して、ファブリスを思う心理を細やかに描き出す。「バルム」の登場人物たち、とりわけファブリスの希薄な存在感はこの捻れにも関係するのではないか。

いずれにせよ、ボルスターの「発見」の楽しさがひしひしと伝わってくる解説／論文とともに、19世紀初頭の一流作品中の断片でしかなかった『エレオノールの物語』がこの20世紀末の今日に瀟洒な単行本となって出版されたことは、確かにまた一つスタンダールのテキストに奥行きを与えた。それ以上に、スタンダールの原テキストが新たなテキストを産出し飛翔させる現場に我々を立ち合わせてくれた。源泉探しとは、時間を逆行するものであれ、実のところ新たな創造なのであろう。

書評

Lacenaire, *Mémoires et autres écrits*. Edition établie et revue par Jacques Simonelli (2e édition), Jose Corti, 1998, 390p.

井出 勉

ピエール＝フランソワ・ラスネール (1803-1836)の『回想録』は、単なるブラックユーモワのものとしても、《la littérature argotique》の系譜に属するものとしても簡単に割り切ることができない。同時代のもう一人の神話的人物、ヴィドックの『回想録』と比べても逸話的なおもしろさでは劣るが、逆に死刑囚であるがゆえに、真実を述べようとする態度や感受性の強さ、幼年期の記述などは『アンリ・ブリュラーの生涯』の一節を読んでいるような感を与える。《詩人 - 人殺し》のラスネールと、《追い剥ぎ - 探偵》のヴィド

ックの両者のまれな特質には、ロマン主義者の多くが魅せられる。ラスネールに限っても、ユゴー、ヴィニーしかり、ロートレアモン伯爵しかりである。またジュール・ジャンも『演劇文学史 (Histoire de la littérature dramatique)』において、ラスネールが、詩人のエドガー・キネットなどとともにリヨンのコレージュの学友だったことを認めている。さらにラスネールが、一見華奢ではあったがなかなかのハンサムでダンディであったことも、スタンダールの読者にとっては決してなおざりにできない点である。それゆえこの「le dandy du crime」にスタンダールが『日記』や『ある旅行者の手記』の中で幾度かその名を挙げ、「ラスネールもまた自分の『回想録』を書いている」（1835年12月27日付『日記』）と述べていることは十分にその関心の高さを示している。ラスネールの『回想録』は、実際1836年に刊行されているが、特に1835年来『法廷新聞』などで盛んに取りざたされていた事を考えると、スタンダールも諸般の事情にかなり通じていたであろうことは容易に想像できる。従って、以後のスタンダールの作品、とりわけ『パルムの僧院』（以下『僧院』）や『ラミエル』にラスネールの分身的存在を認めることができる。また逆に『赤と黒』の読者なら、ラスネールの神学校における体験の記述（とりわけ周囲となじめず「un véritable suppot de Lucifer」と呼ばれる）や裁判での雄弁などにジュリアンの影を感じ取ってしまうのではないだろうか。

スタンダールの女性人物がすべてアウトロー的人物を愛するのは宿命であるという、生島遼一の指摘を待つまでもなく、マチルド、サンセヴェリーナ公爵夫人、ラミエルは確かにこうした人物に心惹かれる。その意味でも『僧院』のフェランテ・パラなど、「追い剥ぎ - 詩人 - 共和主義者 - 死刑囚」という顔をもった典型的なアウトロー的人物である。さらには、綴り字の間違いを気にする《俗語の詩人》ロドヴィコも付け加えることができるだろう（ラスネールの『回想録』にも綴り字の誤りが何ヶ所もある）。また素描ではあるがラミエルが真の愛を知る相手ヴァルベールこそ、ラスネールをモデルとして造形された人物であることは誰もが認めるところである。実際スタンダールはヴァルベールに対して「ラスネールのように」という表現を用いているし、社会の不正に対して復讐する姿勢も同じである。それゆえ、もしプランだけでなく十分に筋の展開がなされていたら、ヴァルベールの《盗賊 - 詩人》としての姿もより明確にラスネールの人物像に近づいていたであろうと思われる。ラミエル自身も、ラスネール以前の伝説的追い剥ぎ（密輸者）マンドラン(1724-1755)の生活に憧れていて、このことがヴァルベールのような男に魅せられる伏線となっている。スタンダールが描くアウトロー的人物の系譜はまたロビンフッド的人物の系譜でもある。アーヴィング・ホーが指摘した、フェランテ・パラのロビンフッド的な義賊的性格は、マンドランや、ラスネールの『回想録』にもかいま見ることができるのである。

さらにラスネールの『回想録』の中の逸話に興味深いものがある。例えば、ラ・フォルスの長官にお前呼ばわりされたことに対して、自分のような教育と物腰の者には不当であると不満を漏らしていること、ヴィドックの後継者アラールによってはずされるが、一時的に足かせに加えて、手錠の前身である親指締めまでされていたことなどは、『僧院』のファブリスとバルボーネとのいざこざを想起させる。また、童貞喪失の際にラスネールが

つぶやく言葉 «Quoi! n'est-ce que cela?» は、処女喪失の折りのラミエルの感想、「Quoi! l'amour ce n'est que ça?» とおもしろいほどよく似ている。

以上のように、19世紀の多くの文人たちを魅了したラスネールとその『回想録』は、カルトシュ、マンドラン、ヴィドックら伝説的な犯罪者とともに、作家の豊かな靈感源となってきた。スタンダールもまたそうした一人であったことは間違いない。しかしながら、スタンダールがラスネールをどう理解していたかは、『日記』などの断片的な記述からではなくむしろ、ラスネールの『回想録』を読み通した目で『僧院』や『ラミエル』を眺めたとき初めて見えてくるのではないだろうか。

尚、この『回想録』の版には、他に詩や戯曲、書簡なども含まれており、ラスネールの《詩人》としての才能を判断する一助となっている。

書評

Yves Ansel の書評について

下川 茂

書評についての書評などという胡乱なものを読者に書く気にさせる程、Ansel が *L'Année Stendhal* 第2号 (1998) に載せた書評は刺激的である。彼の書評の対象は *Le Livre de Poche* 版 (1997) の『赤と黒』だが (Préface, commentaires et notes de Michel Crouzet)、最初の数行を、本文校訂の確かさと、質の高い注の賛辞にあててあと、彼は、残りすべてを、編者 Crouzet の序文の攻撃にあてている。しかも、その攻撃は、形式と内容両面からのもので、全く救いの余地を残さぬ徹底的なものである。近ごろこれほど攻撃的な書評は読んだことがない。その意味でも注目すべきものだが、もう一つ評者の注意を引いたのは、その内容攻撃のスタイルが著しく政治的なことである。Ansel によれば、「c'est une intéressante curiosité historique que cette Introduction ouvertement réactionnaire» (p. 159) ということになる。*Livre de Poche* 版『赤と黒』を持っていなかった評者は、早速書店 (京都丸善) に走った。幸い在庫があり、すぐに «intéressante curiosité historique» は手に入り、Ansel の言い分を検討することができたので、その結果を報告する。評者の結論を先に述べておくと、「intéressante curiosité historique» は Ansel の書評の方であるというものである。

形式についての非難をここで詳しく取り上げるつもりはない。文庫本の読者である高校生や大学生には専門的すぎる、作品の位置、特性等の初心者向けの紹介がなされていない、諸説を公平に扱っていない等々、初心者向けの版の序文のルールから外れているという点は、フランスの学校教育に携わる Ansel には大事なことなのだろうが、外国の一スタン

ダール研究者に過ぎない評者には、それほど非難すべきこととも思えない。繰り返しが多く、曖昧という非難も、評者のフランス語読解力に係わってくるので判断を控えたい。

そこで問題は内容に絞られるが、上にも述べたように、Ansel の立場は明確に政治的である。もちろん、それだけではなく、Crouzet の批評が古めかしい個人的心理主義的であって、「la révolution critique」(Ibid.) 以前だという方法論的非難も述べられているが、それは付け足しで、Ansel は、Crouzet の作品の読解が彼の左翼的読解と衝突することが何より気に入らないのだ。「Le fait est que la «Chronique de 1830», visiblement trop «jacobine» pour le critique, qui lui préfère, ô combien ! (...) l'aristocratique «utopie» de *La Chartreuse* (...) échappe largement aux prises du «présentateur» qui ne sait comment pastelliser, rosir *Le Rouge*, trop «âpre» à son goût de bon goût» (Ibid.) Ansel の批評の政治的立場がジャコバン主義であることがよく分かる一節で、ブルム以来の単純な左翼的ジュリアン像を批判する Crouzet の読解が反動的に見えるのも無理はない。実は、Ansel の方が、新しいフランス革命研究とスタンダール研究を無視し、いまだに古めかしい革命観と文学観（リアリズム）にとらわれている反動的な存在なのだ。スタンダールの本文を歪めて解釈していると彼は Crouzet を非難するが、Crouzet の序文を歪めて解釈しているのは彼の方である。読者は、次の一節を、後に挙げる Crouzet の文と比べていただきたい。Ansel は Crouzet の文の二つの部分を切り貼りして、自分の都合のいいように解釈している。Crouzet は個人的心理主義者でもなく、個人と社会の関係を無視しているわけでもない。ジュリアンの「暴力性」が「社会的で二次的」だという Ansel の言い分に透けて見えるのは、すべてを社会のせいにする悪しき左翼的社会観であり、それこそが、ジュリアン像を単純化し、その複雑な内容を無視させる元凶である。

Ansel: L'introduction offre l'occasion d'asséner force vérités fort contestables (la violence de Julien serait «première», là «dès le début», comme si le héros n'était pas depuis toujours, un enfant battu: la violence intériorisée de Julien est sociale, seconde (...)) (Ibid.)

Crouzet: Chronique d'une révolution dont il ne parle pas, *le Rouge*, plein de violence dès le début, est une œuvre de crise et de tension, une lutte des consciences et des classes (...) le heurt des individus renvoie toujours à des conflits collectifs, l'amour lui-même est un fait de classe (...) (p. II); Ce roman de l'action (...) se déroule dans un climat continu de violence qui émane de Julien, et (...) (p. VII)

研究活動報告（1998年4月1日～1999年3月31日）

（今回ご報告いただいたもので、スタンダードに関するものに限って掲載させていただきました。また、本件休会での発表要旨等、すでに『会報』に掲載のものについては省略させていただきました。ご了承ください。）

石川 宏

- ・〔翻訳〕ルネ・モーリ著『ナポレオン暗殺ーセント＝ヘレナのミステリー』、大修館書店、1998年9月20日

井出 勉

- ・「スタンダードと舞踏」、『中部大学人文学部研究論集』第1号、1999年1月
- ・「『バルムの僧院』における《聖人の日》」、『名古屋聖霊短期大学紀要』第19号、1999年3月

梶野 吉郎

- ・「大岡昇平ースタンダードとのかかわり（『武蔵野夫人』の場合を中心に）」、北海道大学言語文化部研究報告叢書31『感性の変容』、北海道大学言語文化部、1999年2月
- ・「Avec la vivacité et la grâceー第六章にアリアが響くー」、『フランス研究』第1号、北海道大学フランス語フランス文学研究会、1999年3月

柏木 治

- ・「*Lamiel*ー政治と情念のトポス」、『仏語 仏文学』第26号、関西大学フランス語フランス文学会、1999年2月28日

後平 隆

- ・「文明論のなかのスタンダード」、慶應義塾大学日吉紀要『フランス語フランス文学』第28号、1999年3月

高木 信宏

- ・「『アルマンズ』における主人公の造型」、『ステラ』第17号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1998年6月25日

松原 雅典

- ・「『バルムの僧院』の中の聖ヒエロニスム」、『成蹊法学』第47号、1998年3月（前回未報告分）
- ・「『赤と黒』における古典と歴史的故事のモチーフ」、『成蹊大学一般研究報告』第30巻第3分冊、1998年6月
- ・「スタンダードにおける小説の成立ー中期のロココ的著作から小説へ」、『成蹊法学』第48号、1998年12月
- ・『スタンダードの小説世界』、みすず書房、1999年2月25日
- ・「バルザックとスタンダードーバルザックの『バルムの僧院』評をめぐって」、『成蹊法学』第49号、1999年3月

後記

『会報』第9号をお届けします。

今年はバルザック生誕200年にあたるせいもあって、刊行物を見るかぎりバルザックにおされ気味。しかし、世界のスタンダリアンたちがバルザックについて書いたものを読める絶好の機会でもあります。バルザックとスタンダール、言い尽くされたかにみえるこの関係をもういちど問いなおしてみることから、案外新しい視点が拓けてくるのかもしれない。

今回も原稿をお寄せくださった会員諸氏に感謝いたします。次号に向けて、書評・新刊紹介のコーナーへの投稿もよろしくお願ひ申し上げます。投稿して下さる方は来年の一月末までに事務局までその旨お知らせください。実際原稿締切は三月末を予定しています。

(柏木 記)

スタンダール研究会事務局

〒657-0011

神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学国際文化学部 岩本研究室 (078-803-0804)